校長研修だより１４４（2023 年度最終号）

全てを飲み込んでベストを尽くす

2024・3・21　重枝 一郎

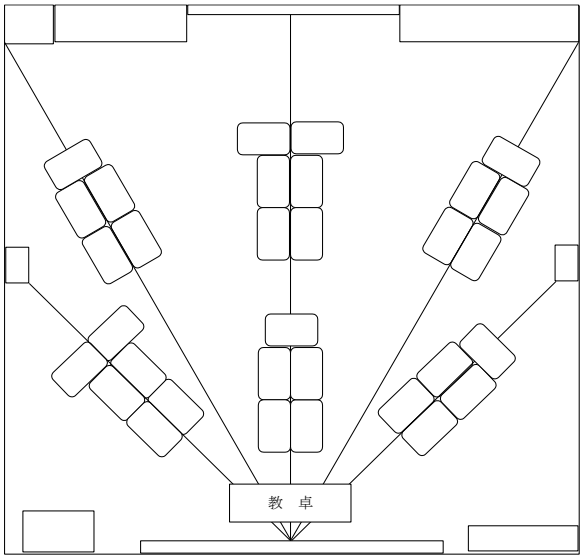
以前私は「品格」という話を校長研修だよりで書いた（110 号）。それは女学院生の品格についてである。表面的な作法や言葉遣いが素晴らしくても，意地悪な人はいる。つまり，本質的にどうなんだという話である。私は一つの例として「視線」の大切さを書いた。なぜなら無関心な態度はとても品がないと思うからである。

私たち教師の日常は，人との関りの連続だから全て品格を磨く機会になる。そんな日常で，自分と合う人，合わない人，楽しいこと，楽しくないことがある。時にネガティブな状況に支配されることもある。このような状況だと，もう何もできないと絶望することがある。でもよく目を凝らしてみると，どんな状況でも前向きに行動する人はいる。このような人はどんな考えで，その時を過ごしているのだろう。

１月に能登半島地震が起こった。想像以上に困難な状況におかれた人がたくさんいる。先の見えない状況の中で，ある方のインタビューを TV で見た。その方は「復興できるかどうかわからないけれど，まずは**全てを飲み込んでベストを尽くす**」と語った。この方の**「全てを飲み込んでベストを尽くす」**という言葉を聞いて，本校の先生方の日常の姿勢について思ったことがある。

学校は，生徒の学力が上がらない，生徒が勉強しない，保護者がうるさい，保護者の干渉で生徒の成長が妨げられているなど，結果を生徒や保護者のせいだと考えようと思えばできるのかもしれない。でも，本校の先生方はそうではない。**「全てを飲み込んでベストを尽くす」**を実践している。これが**本校の品格**である。

私たちが生徒の成長に対して，何を求めているかでやり方は決まる。例えば，私たちは，今の教室の縦横机が並んでいる風景を見て違和感をおぼえるだろうか？　私たちのほとんどの人は全く違和感をおぼえないと思う。ただ，日本の学校の教室風景は約７０年間変わっていない。しかし世界は 2000 年を過ぎた頃から変わっている。求めるものが違うと変化が生まれる。それでも日本では，依然として「知識の量」と「過去の経験」を重視していた。ところが世界は，それでは未来の出来事を解決できないと判断し，創造性を養うための教育にシフトチェンジした。それに伴って教室も机をグループ化して立ち歩きも当たり前の風景となった。



「校長研修だより 90 号」「仏作って魂入れず」で一度紹介しているが，1999 年度から 2009 年度現場最後の年までの私の実践を紹介する（自分の学年から始めて，３年後は学校全体の取組になる。２校で実践した）。

左図のように班を作って集団づくり，人間関係づくり，そこから波及する学力向上に取り組んできた。形だけでは集団づくりにはならない。そこで日常のすべての教育活動はこの班活動を基盤とした。効果を上げるために，特活や道徳の

時間はグループワーク TR を導入した。その取り組みは，学校・学年・学級だよりで紹介していた。ちなみに列のカタチにするのは定期テストの時間だけである。

この形態は，
・これによって横向きの生徒も少し横を向けば黒板に正対できる。
・６人班の時に，全員がお互いの顔を見て話をすることができる。

テーマは
⑴　友だちの考えや行動を参考にしよう。
⑵　友だちの目から見た自分に気づこう。
⑶　友だちと自分の行動，考え方，感情の違いの比較から，新しい気づきをしよう。

また，人間関係の善し悪しが教育活動の質を左右するので，相手の立場にたった自己表現力（アサーティブ）を身につけるためにもこの取り組みを生かしていた。

私の 1999 年度から 2009 年度の間の学校は，福岡市西区の下山門中と博多区の千代中であった。その時の研究紀要は今私の手元にはないが，福岡市教育センターにはある（閲覧可能）。
下山門中の時は，赴任当時は不登校生 36 名であったが 4 年後には 0 人となった。また，学力は西区 10 数校中の中位から 1 位になるまでに向上した。
福岡市博多区の千代中の時は，赴任当時の想像を絶する荒れはなくなった。当初の朝の HR 時は３名しか登校していなかった状況は，普通の登校風景に変わった。全教科授業崩壊していた授業も当たり前に進めることができるようになり，学力は福岡市でダントツの最下位だったのが，なんと福岡市の中位まで向上した。
両校共に研究指定校として研究発表会を行った。千代中の時の私のクラスの授業には約 200 人の参観者が来校した。発表会が終わると，学校が荒れて困難な時代の元千代中の退職校長先生が，涙を流しながら私に握手を求めてきた。
言わなくてもわかっていると思うが，私一人でやったことではない。また，管理職から言われて実践したことではない。生徒に対しての感度を高めて実践しただけである。

よく先生方から，「この学校はどう進めばいいのか」という話を聞く。私は目標を共有する手前の「自分の在り方」つまり「ビーイング」が最も重要だと考えている。目標を共有しても「自分はそうは思わない」のようなことに結局なるからである。だからどんな人間なのかをまずは契約するべきだと思う。来年度も，「心地よい関わり合いを大切に，各自目標をもってのびのびと仕事する学校」にしたい。「人事評価がなくても，成果を上げたかどうか各自考えている」人たちであってほしい。そして，生徒を「自律型学習者」に育てたい。

今号で紹介したやり方は，本校に合っている気がする。また，学習指導要領には，どの教科においても「道徳教育」という言葉が入っている。本校は，それが**「宗教教育」**になる。**自他の幸せを，教科の時間においても実感できる時間にしなくてはならない。**

先生方，１年間ありがとうございました。来年度も「教師が明るく仲が良ければ、生徒も明るく仲も良くなる！」というマインドで，ワクワクしながらやっていきましょう。来年度もよろしくお願いします。短い休みですが，ちょっとはリフレッシュしてくださいね。